

E-1 人間生活と宗教建築の機能性

茨城キリスト教短大 佐藤京子

目的 人類の文化遺産の一つとして建築遺構を考えるならば、わが国に数多くある重要文化財や国宝建造物が注目される。これらのなかで、宗教建築として考えられるいくつかの遺構に接するとき、文化財と人間のいとなみとの深いつながりを感じ、生活空間としてのこれらの建造物に、人間はなにをもとめているかを、現代の時点で追求してみたいと考えた。

方法 建造物に関する文献、とくに宗教建築に関する写真、図版などの資料とともに、実際に調査し、写真に収めたものによって検討した。

結果 住空間を生活空間として広義に考えるとき、宗教建築は宗教的生活感情のたかまつた時代には、その遺構も多く、とくに7～8世紀は、人間の信仰生活、宗教観などの深まりとあいまって、文化的思潮のつよさを感じると同時に、日本文化の根底をなされるヒューマニズムを見逃がすことはできない。人間の生活も変貌している現在にもかかわらず、その人間観と機能性から遺構の造形的意義をあらためてみなおすことができたように思われる。